

財団だより

多摩川

1983. 6. 第18号



●オオヨシキリ キョギョシ、
キョギョシ、ケチケチと鳴く
アソ原に渡る夏鳥



青梅のスギ林 良質の杉材は、イカダによって多摩川を運ばれていた

■ 多摩川博物誌 ■

② 青梅杉

青梅市内の山々を見ると、杉・ひのきの植林された山の多いの目をうばわれる。おそらく全山の七割は植林山であろう。もともとこれらの山々には、奥多摩地域をもふくめて、なら・はんのき・かえで・つが・もみ・まつ・ぶな・けやき・そろなどのおい茂る自然林であった。江戸城内のあいつづ築城工事や、江戸市街の造成には多量の木材が必要で、江戸にもっとも近いところから、青梅以西の山々、つまり三田鎮の自然林は、建築用材の供給地となった。江戸の材木商人がうけおって、木材を川出ししたという、元禄年間の記録もある。

杉やひのきの植林は、このような自然林の伐採がおこなわれた跡地からはじまったのであろう。青梅地方の山々は秩父古生層に属し、杉・ひのきに適する地味をもち、しかも湿気も多いので成育もよく、自然林とくらべると五倍から六倍もの成長率をもち、しかも良材なので経済面からみても有利であったので、植林地は年を追って多くなった。植林の古い記録では、元禄七年（一六九四）沢井村で、植林地の杉の木をきったとあるので、江戸初期にはもうこの地方では、植林がおこなわれていたことがわかる。耕地の狭い山地の人びとが、経済的に有利な林業に、本腰をいれるようになったのも元禄ごろからであろう。

きりだされた材木は筏に組まれ、多摩川を利用して江戸まではこばれた。はじめのころは江戸商人が請負っていたが、やがて地元の有力農民が、これにかわるようになり、山林を買い、伐採し、筏で流し、江戸の

材木問屋に売り付ける、地元の材木業者が出現した。そのような地元業者を、筏師と呼んだ。

筏師は団結して筏師仲間という同業組合をつくり、江戸の材木業者との間に「筏師仲間以外から材木を買ってはならない」という協約を結び、地域産業の発展に大きな存在となった。享保十七年（一七三二）は大飢饉の年で「百姓どもは、もはや餓死寸前です。青梅・江戸方面へ乞食にでたいと申すものが大勢います」という記録が奥多摩町にはあるが、例の谷合見聞録では、同じ年の四月の頃に「近在の村々では役所から食糧をお借りして食っているが、当村（二俣尾村）と沢井村だけは、借りないですぐすことができ、年貢も二月にはみな納めた。これもみな筏のおかげである」と、材木業がさかんなため、村内に経済的ゆとりのあったことを記している。

筏師にやとわれている職人や労務者には、木挽・柚・杉切り・木かつぎなど大勢いたが、筏を組み多摩川を下って六郷の川口まで輸送する筏乗りは、いなせな稼業であった。危険もあったろうが、当時としては相当な高給取りで、日給に換算すると三九四文くらいになり、大工一九〇文、左官三一六文、日雇い一二〇文にくらべて、二倍から三倍の収入があった。「きのう山さげ今日青梅下げ、あすは羽村のせき落し」と、唄われているように六郷まで四、五日かかり、帰りは多摩川伝いに五十キロを歩いて帰るのだから、たいへんな労働でもあったようだ。

「多摩の歴史」6 武蔵野郷土史刊行会 昭和五十年

多摩川散歩



お鷹道 (国分寺から始まる遊歩道)

●野川水源地帯

昔の野川の水源は、国分寺崖線（ハケ）から湧き出る湧水と、玉川上水から分水されていた農業用水であったようだ。そのため、水量は豊かで、しかもきれいな水が流れていた。玉川上水からの分水は、昭和40年代にはその役割を失ない、現在では、全く野川へは流れてこない。しかし、ハケからの湧水は、かぼそいながらも、まだ健在で、いたる所に浸み出している。

野川の最上流は、現在、日立の中央研究所になっている広大な雑木林の中にある。そこには、湧水を集めた池があり、その池が野川の水源地とされている。この林は、国電・中央線の国分寺駅から西へ5分程の所にあり、線路づたいにおりていくと、樹林のすき間から見る事ができる。この池から出た水は、すぐその下で、国分寺や小平あたりの家庭排水と合流するため、残念ながら水はすぐ汚れた流れとなって下流へ向かうことになる。中央線のガードから約600mほど下ると、野川がカギ状に曲る不思議な所がある。不動橋と呼ばれる所で、川の中にコイやフナを泳がせる小さなプールが作ってある。この不動橋のたもとに、野川に流れ込む、小さな流れがある。この流れは、元町用水と呼ばれ、その奥から湧水のみを集めて流れるきわめて清冽な流れである。流れを500mほど辿っていくと、このあたりの地名となった武蔵国分寺に辿りつく、現在、ここは、国分寺とともに、住職の星野氏により、万葉植物園や、石器や土器などを集めた資料館があって訪れる人が多い。

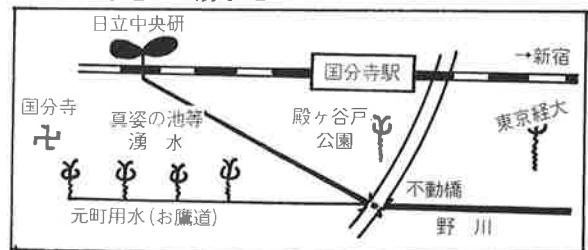
元町用水の流れは、このお寺の境内にある湧水から始まり、その隣の民家の裏手から出る湧水や、真姿の池の水など、いくつかの湧き水を集めて流れている。この用水は、農業用水ではなく、純然たる生活用水で、飲料水や洗い物に使われ、水を汚す事は厳しくいましめられていた。崖下は地下水位が低く、井戸を掘る事が大仕事だったため、このような湧水が生活水の全てだったと国分寺のご住職に話を聞いた。今は、飲料水にする事はないが、相変わらず、野菜を洗ったり、時には食器なども洗う事もあるそうだ。このあたりには、新しい住宅が建ちはじめ、用水の意味や水を汚さないようにするお互いのマナーもなくなってきたとも話しておられた。

この用水に沿って、写真にみるような遊歩道がつくられている。お鷹道と呼ばれているが、これは江戸時代の将軍が鷹狩りにきた事から、その名がつけられた。用水に沿って、約200mほど続いている。秋には、そばの農家で柿などを分けてくれ、色づくハケの雑木林や古い民家の黒ペイが、かつての武蔵野の雰囲気を見せてくれる。

ハケからの湧水は、春さきには減少するが、夏から秋にかけて豊かな湧き水を出し続ける。春さきは、木の芽が吸いつくすからだど土地の人は教えてくれるが、最もな気がする。

用水が終る不動橋から、小金井方面に向かうと殿ヶ谷戸公園、東京経済大学などが、ハケの中に見える。ここにも湧水があるが、あまり水量は多くない。野川から離れるが、この公園や大学の下つまり、ハケ下の道は小金井を経て野川公園あたりまで続いており、日帰りの、歴史や自然を訪ねる絶好の場所になっている。（山道省三）

●国分寺近くの湧水地





東京農工大学農学部助教授 小倉紀雄

河川は上流から下流へ流れ、同時に多くの物質を運搬している。また河川ではいろいろな物質の変化（物質代謝）がおこっている。「三尺下れば水清し」と諺にあるように、流下に伴ない水はきれいになる。まさに「川は生きている」のである。

私がこのようなことを強く感じるようになったのは、昭和49年4月に府中市の東京農工大学に勤務し、多摩川やその支川の南浅川、野川、大栗川の調査研究を行なうようになってからである。

南浅川との初めての出会いは、昭和50年4月、宝月欣二先生らと、源流から北浅川との合流点まで調査を行なった時であった。源流の小仏峠付近は人間活動の影響をあまり受けておらず、水質は良好であった。(写真1)比較的良好な水質は中流の南浅川橋付近まで保たれていたが、その後団地排水などの流入により水質は著しく悪化することがわかった。(写真2)

南浅川は私共の大学から近く、短い距離（全長約14km）で水質が著しく変化するので調査しやすく、多摩川のミニフィールドとして最適であると考えた。その後1～2ヵ月に1度、調査を行ない河川の姿を明らかにし、そのための方法論の検討を行なってきた。このような研究し易いフィールドを選ぶことができ幸いであった。

河川における有機物分解の大きさ（自浄能力）を推定するために、一定量の有機物（ショ糖）を河川に投入し、下流での回収量より自浄係数を求



めることができた。昭和53年7月には雨が少なく、下流で河川水は伏流によりほとんどなくなり、途中で流入した下水が河川水となっていた場合もあった。また観測中、激しい雨が降り、急に増水し観測器具を流されたこともあった。このようないろいろな経験を重ね、観測を継続し、河川の姿を理解したいと思っている。

もう一つ印象に残ることは野川の湧水のことである。野川は国分寺崖線からの湧水を集めた河川であり、国分寺市、小金井市、三鷹市、調布市の各所で湧水がみられる。湧水は一見すると非常にきれいであり、地元の方々はお茶を点てるのに現在でも湧水を用いているそうである。しかし、その硝酸態窒素濃度を測定し驚いた。その濃度は7～14mgN/lにも達し、多摩川上流（奥多摩湖へ流入する後山川）の値（～0.2mgN/l）に比べ数十倍も大きかった。

湧水中の高い硝酸態窒素濃度の原因は何であろうか？ 集水域の土地利用状況、排水処理方法の調査、湧水中の硝酸態窒素安定同位体比（15N/14N）の測定などより、高濃度の原因は排水の土壌浸透処理（吸込み）の影響であることがわかった。排水の処理には地下水・湧水を汚染させない対策を考える必要がある。

河川を正常な状態に保つためには、河川の持つ自浄能力を上回る汚濁負荷を与えないことである。今後、多摩川およびその支川の自浄能力の限界を明らかにし、多摩川に清流を取り戻すための基本的な考え方を作ってゆきたい。



多摩川・二つの展示会

●川崎市青少年科学館「多摩川コーナー」

川崎市多摩区にある生田緑地は、今、クヌギやコナラの新緑が日ごとにその色を変えている。43ha程もあるこの緑地には、自然観察路が園内をめぐり、多摩の自然そのままを、歩きながら知ることができる。その一隅に、この三月、青少年科学館がオープンし、常設展示場として、「川崎の自然の理解」をテーマとしたコーナーがお目見えした。

「川崎の大地のあゆみ」や「多摩丘陵の四季」などにあわせ、「多摩川・その姿」の展示が、精巧な模型や写真、ジオラマといったさまざまな方法で、解りやすく展示されている。

多摩川のコーナーの展示は、現在、多摩川の自然と題し、植物や魚、川石などの実物や写真で構成されている。この展示にあたっては、準備中から、財団が蓄積してきた研究や資料を大いに活用していただいた経緯がある。又、展示監修者として、財団の研究活動に参画していただいている筑波大学の三島先生をご推薦した事情もあり、先日、会場を訪れてみた。多摩川流域内に、こうした青少年の教育施設として、多摩川の自然を取りあげ、常設展示をしているところは、おそらくここが初めてであろう。細かい所に気を配り、できるだけ実物に近く、子供の目にも良く理解できるすばらしい内容とできばえであった。

●玉川高島屋「多摩川」展

四月の末、二子玉川の高島屋コンコースで、多摩川展が開催されていた。この展示会は、多摩川

の古図、測量図、絵図、浮世絵などが所狭しと並べられ、人でごったがえしていた。多摩川の近くに住む人が多いせいもあろうが、関心の深さを伺わせていた。展示物には、二子橋上で行なわれている建設省による野川の水質浄化装置の模型が展示されていた。又、夕方からは、同デパートの体育館で、民間の八ミリ同好会による「多摩川」の映画が上映された。このグループは、多摩川を愛好する有志が趣味の八ミリカメラを手に、最上流から河口に至る多摩川の自然、人々の暮し、文化財などを撮ったもので二時間に及ぶ力作であった。日曜日の夕方にもかかわらず約300人ほどの観客が詰めかけ、整理券すら発行されていた。

この二つの展示会を見て卒直に感じる事は、住民の多摩川に対する関心の深さである。今回展示が行なわれた二つの場所は、多摩川中流部にあたり、この10年の間に目ざましい人口の定着が行なわれた一帯である。そろそろ、新しい住民による地域の環境や文化に対する関心が深まりつつある地域ともいえよう。そうした人達にとって、やはり、多摩川はひとつの大きなシンボルであり、新しい故郷ともなる存在である。住民にとって、多摩川的全貌を知るでだては今のところないに等しい。この二つの展示会に多くの人がつめかける背景には、やはり、多摩川の事を少しでも知りたいという欲求が潜在している事になる。多摩川の環境を少しでも良くしようとする為には、こうした住民の関心が重要な存在である。今後とも、「多摩川展」は各所で催されようが、願わくば、常に見知る事のできる場が流域の各所にできる事を期待する。その中から、住民による新しい文化や環境像が多摩川をステージとして生まれてくるならその地域の人々にとって、多摩川はより身近かな存在となっていくに違いない。財団は、そうした活動に、現在までの研究の成果や情報を積極的に提供していきたいと考える。この二つの展示会を見て、その印象を強く持った。

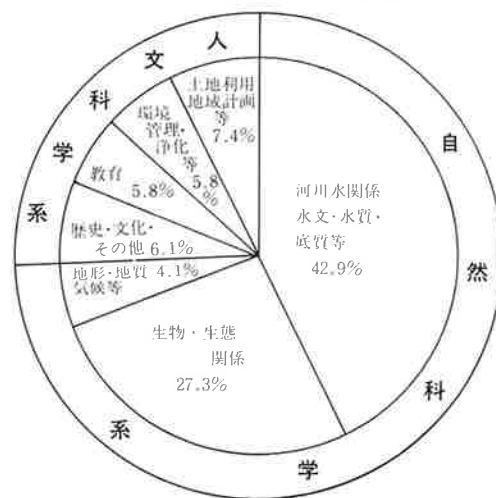
《多摩川およびその流域の環境浄化に》 《関する調査・試験研究募集 — 第二次 —》

財団は昭和58年度の調査・研究を昨年12月発行の「財団だより・多摩川」等によって公募いたしました。応募多数のうち本年3月開催の選考委員会に於て、学術研究（新規）6件、一般研究（新

規）6件が選考され内定いたしました。

その結果、本年度助成枠に若干の余裕を生じたので、追加第二次募集を致します。

●財団の助成研究の分類



●現在までの助成研究の傾向

右の表は、財団が多摩川研究に対して昭和57年度までに助成を行ってきたものを、大まかに分類したものです。学術研究と草の根研究をあわせたもので計123件（学術研究85件・草の根研究38件）をその内容により任意に分けたものです。この表を見てもわかるように全般に自然科学系統が圧倒的に多く、全体の70%を占めています。その中でも特に、水質や水収支といった水に関するものの比率が多いのは、多摩川という研究対象の性格上当然の成りゆきといえましょう。その次は、植物や昆虫、野鳥、魚といった生物関係の調査が多く、この二つでやはり、全体の70%を占めます。人文科学系統は、全般に平均的で、特に目立つ分野はありません。しかしながら、土地利用や地域計画、環境管理や浄化対策など応用研究が多く、これから、さらにその比が大きくなる事が期待されます。草の根研究は、全般に、小・中・高校の先生が参加されていますが、その内容も、学校教育と関連した調査が多いようです。

財団に応募される最近の研究内容を見ていると、今までの研究内容にさらに新しい視点を持たせたユニークな研究もいくつか見られ、研究がさらに次の研究を呼ぶといった歓迎すべきものもあります。財団としては、右の表のそれぞれの分野がバランスよく分布されるよう、さまざまな学問分野へアピールしていますが、まだまだ、多摩川というと「水」といった先入観があるようです。多摩川は都市の中の川であるわけですから、通常の

河川研究のように、水や生物ばかりではなく、もっと人間の生活や文化、都市問題を含めてさまざまな分野からの応募を望んでいます。そして、研究や調査というと学識経験者でなければ……といった声もありますが、地域住民によるその地域でなければできないような研究や調査が当然あるのではないかと考えます。民間の財団であるわけですから、その利点を大いに生かした助成を行なっていくつもりです。財団としては、ひとつには今後、地域に根ざした研究を大切にしたいと考えています。幅広い分野からの応募を期待しています。

公募締切日 昭和58年7月29日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号

(地下鉄ビル内) 電話(03)400-9142

(財)とうきゅう環境浄化財団

財団の事業紹介

多摩川'83の発刊について

多摩川シリーズは、年1回の発行ですが、今年で9冊目になりました。今年のテーマは「野川は甦るか？」と題し、国分寺市を水源とし、二子玉川で本川に合流する野川を取り上げました。野川はかつて死の川と呼ばれましたが、最近では豊かな湧水群から流れる水を背景に、下水道の整備により家庭排水が減った事もあって、かなり良い状態になってきました。しかしながら、このままで

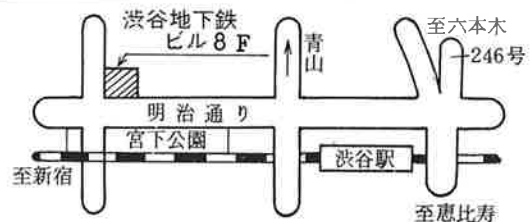
は、やがて、神田川や目黒川のような都市排水路になるかもしれない瀬戸ぎわにある川です。この野川を、現在に甦らせるにはどうすればよいかを、さまざまな角度から検討したものです。

資料編は、昨年特集した「浅川」の関連資料とともに野川についても、いくつかの資料を収録しました。6月中旬には発刊の予定ですので、興味のある方は、財団事務局までお問い合わせ下さい。

●多摩川シーズンニュース

- 昭和58年2月24日 毎日新聞
何とか すみついて……
死の川、野川にコイ、フナ5000匹放流
- 4月1日 読売新聞
第10回多摩川清掃へどうぞ
市民参加を呼びかけ
- 4月29日 朝日新聞
まくらは高くできぬ、(都水防計画より)
多摩川支川に要注意河川が数箇所
- 2月24日 東京新聞
稚魚よおまえは帰れるか?20数万匹が旅立
多摩川でいまサケ放流ブーム
- 4月10日 朝日新聞
自然壊す河川敷公園
多摩川の自然を守る会が観察会
- 5月3日 読売新聞
200万年前の貝殻々と
府中、多摩川河川敷で出土
- 2月25日 朝日新聞
無リンも危ない!
日野市で合成洗剤追放三多摩集会
- 4月17日 神奈川新聞
私たちの川を見直そう
多摩川のすべてを展示、玉川高島屋
- 5月4日 読売新聞
秋川にも近く「鮭を放流する会」の
70人が川歩き現状観察
- 3月4日 毎日新聞
“江戸の昔。を残します
国分寺市が恋ヶ窪用水を整備
- 4月19日 毎日新聞
手づくりのあずま家で溪谷美を
奥多摩町氷川溪谷に完成
- 5月11日 読売新聞
人を襲い狂暴化、手に負えません
福生多摩川沿い捨て鶏ユートピア
- 3月9日 日経新聞
日野市緑化基金創設へ
土地買い上げ乱開発防ぐ
- 4月23日 読売新聞
多摩川に天然アユが! 5万匹スイスイ
丸子橋で調査、サケそ上にも光
- 5月11日 読売新聞
0.1平方メートル運動が市民ぐるみで
来月、市民懇談会を結成
- 3月20日 日経新聞
多摩川浄化に新戦力
夏に野川で「隣接接触施設」稼働
- 4月23日 神奈川新聞
微生物の分解作用で二ヶ領用水を清水に
市職員・学者グループが2次実験に

- 発行口 昭和58年6月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125